

15期 舟田 節子

「そんなに感動するものですかあ？」

通りすがりの英語非常勤講師が、呆れた顔をしていきました。カメラ趣味の某男性非常勤講師も私も、「ハア～」と惚れ惚れで見ているのは、白銀の剣・立山、そして白馬への大パノラマ。当時の勤務校は、海岸部の平野に建っていたため、冬の晴天日の渡り廊下からは、そんな絶景が楽しめました。わかる人にはわかる…と言うしかない至福です。

いよいよ古希…コロナ2年目は、まだまだ攪乱中ですが、その分、じっくり、回顧に浸れました。

某月刊機関誌への「山と花」写真の提供は今も続いています。

そもそもは、昔の卒研指導教官にも、カナディアンロックイートレッキング映像を送信しました。それを、彼が所属する社団法人の機関誌の季節映像として掲載したら、大好評だったのがきっかけなのです。

以来、「山と花写真大歓迎」となって、提供が続いています。私の方は、「どうだ！」が鼻につくような撮影グループは御免で、講釈も腑に落ちない方ですが、地球の宝に惚れ惚れしてもらえるものなら、この程度でよろしいのでしたら、どうぞどうぞ…なのです。

ただ、会の構成メンバーなど詳細を知らない（結構、名誉教授…なんて方がおいでる）ので、複数の映像を送信し、どれを選ぼうと自由…というスタンスでいます。

ですから、時に、「おお、そう来るか！」なんて選択もあります。解釈いろいろ、ときめきいろいろ…。それが自然の懐の深さ、どう楽しんだっというのです。

3年ほどは撮影ほやほや映像を送信し、お蔭で「取材」の足が動くような効用もありました。

それが、コロナのせいで取材が難しくなり、アーカイブ（過去の記録）披露のハードルが下がりました。テレビだって、受信料をとっておきなが

ら、臆面もなく再放送ばかりをやっています。自分が撮った映像である限りは、最新映像ではないことが、そう手抜きに当たるわけではありません。

こんな、披露という機会がなかったら、これほど丁寧に、過去の映像をチェックすることもなかったら…と、これには感謝です。

以前は、「次！」「また、次！」と、あまりにせわしなく過ごしていました。ついつい、過去はもう古いつか、怠慢だとかの評価も下しがちでした。反省です。

11月号…荒沢岳

12月号…奥多摩

1月号…カンチェンジュンガ

2月号…雲竜溪谷

3月号…ニュージーランド

4月号…伊吹山・藤原岳 特別号…放鷹術

5月号…大崩山

6月号…雨飾山

7月号…至仏山

8月号…オートルート（モンブラン）

9月号…オートルート（マッターホルン）

10月号…苗場山

を、この一年で、紹介してきました。



<荒沢岳前嶺と紅葉 2008.10.12>

荒沢岳…300名山には入っていないのに、200名山には入っている山。田中陽希のグレートトラバースで、わざわざ301座と強調したことから、また脚光を浴びました。

それは、時期的には後になった「200名山」が、深田クラブによる選定だったため、久弥が登りがっていた山であることにこだわり、かつ銀山平

からの無雪期ルートができたことで、晴れて新デビューとなったようです。前嵯の岩場は圧巻ですが、鎖やロープさえあれば、ひとまず一般道の内。岩と紅葉の頃がベスト。

奥多摩…東京のツアー会社の馴染のリーダーの本拠地がここでした。忘年山行シリーズとして4年がかりで、三頭山などを一周する企画を出してくれました。毎日布団を干せるのが、表日本の冬なのです。

輪カンに閉口していた私は、喜々と深夜バスに乗って参加し、この方面のシモバシラや、富士の絶景を楽しみました。関越高速バスの事故前、往復6400円の深夜便があり、早朝6時に新宿着。フル活用していました。



<日本海側にはないシモバシラ 2012. 12. 9>

カンチェンジュンガ…中島建郎・石井邦彦のグレートヒマラヤトレール取材が丁度放映されていました。

私のようにくの海外トレッキングデビュー時には、王室乱射事件でネパール方面ツアーが壊滅してしまっていました。同じエリアといえるシッキムで妥協し、ダージリンや、シェルパ活躍の背景を知りました。SL だった谷口けいちゃんとは、ここで始まったご縁です。

4940m のゴチャラへ登頂の朝、パルスオキシメーターは、70 を切ったはずで、金魚のパクパクの目に遭いました。今の、90 を切ったら救急車…の報道の度に思い出してしまいます。

なお、金大山岳部顧問だった鹿野勝彦先生は、この世界第三位の標高の山での同時縦走隊の隊長を務められた方です。さらにその奥様は、ベル

クハイム小屋番の田村教祖を MB で慰問されるような、野性味あふれる方でした

雲竜渓谷…厳冬期、日光の赤薙山下の谷、砂防堰堤群の奥に巨大な氷柱群ができます。「ブルーアイスの回廊を進めば、そこは氷柱神殿」…のフレーズに、軽アイゼンで、遠征しました。

ニュージーランド…岩崎元郎氏の地球を遠足シリーズでした。北島のトンガリロ国立公園を歩き、南島ではマウントクックのフッカー谷をトレッキング。エドモンド・ヒラリーの出身地であり、また高度障害なしで極地ロケができる国、星空保護区が観光資源になっている国でもあります。

ハカの本場物を見て、ワールドカップも楽しみました。

伊吹山・藤原岳…カタクリ（オンソリ山）や、オオミスミソウ（猿山）を紹介してしまったら、次はフクジュソウ、セツブンソウの番になるというもの。ヤマトタケルにちなんで、ヤマトグサも紹介。

放鷹術（いわゆる鷹狩）…番外編。城と庭のもてなし事業で、フードピアの時期に、金沢城公園三の丸広場にて、放鷹術を披露しています。広さと共に、お城をバックには独特の空気感があります。

お正月の出初式といい、城内キャンパス育ちは、今も胸キュンになりながら、観光イベントを眺めています。

大崩山…日本三百名山の西半分制覇を目指しておいでた篠島先輩の絶賛の山。さらには、アケボノツツジが咲く頃がベストとあり、その時期のツアーを選んで参加。盛り上がるような花崗岩群が、それは見事で、日本は広い！になります。

雨飾山…荒菅沢が残雪豊富で、シラネアオイが咲く頃。久弥と志げ子さんが再会したばかりで、「左の耳は僕の耳、右ははしけやし君の耳」とよんだ歌のまつわる山です。

とある夏、北アが天候不順で、山田旅館泊に変更し、時間をもてあましてると、とっておきの

8ミリを見せてもらえました。それは、深田夫妻に同行した友人教師が一か月分の給料をはたき、三度目の正直で登頂した際に撮ったものの、複製「深田先生の百名山の本のお蔭で、私達のような山宿もやっていけます」と語ったおかみ。あれから、予約のとれない宿になって…。

至仏山…花には詳しくなってきたから、オゼソウや、ホソバヒナウスユキソウを見るのが楽しみでした。

至仏山を背景に、尾瀬が原の木道に行く歩荷さん…が表紙でした。見上げる歩荷量を初めて見た読者は、驚愕したようです。

オートルート…もちろん、夏山の題材には全く不足していません。でも、コロナ後は、かえってヨーロッパアルプスなどは大変貌しているかも？載せるなら今の内かも？なんて、気を回しました。

ヨーロッパアルプスは、登山鉄道に、ロープウェイに、開発時期の早さや規模が半端ない。自然保護のため大反対というより、保護をしながら観光活用するにはどうすればいいか…の考え方をする国です。

おっとっと「オートルート」とは、フランス語で「高い道」のことです。「モンブランに見送られ、マッターホルンに迎えてもらうというドラマティックなストーリーが人気のコース」で、もともとは100年以上の歴史あるスキーツアーコースです。近年のブームで、無雪期にも、11か所の3000m近い峠と谷を踏破する総距離180kmの山岳ロングトレイルとして楽しまれるようになったのです。参加したのは、そのうちのハイライト部を12日間（実質8日）で味わうものでした。

シャモニー周辺、ツエルマット周辺は、あまりに観光化され、まるでアミューズメントパークのよう…。

その当時は、快適に、スマートにという山遊びのあり方には、強い違和感をもちました。でも、使いもしない林道を延々と山肌に刻むより、ヘリでピンポイント移動したり、ゴンドラの支柱が立つだけの方が、生態系への負荷は少ないのです。

加齢した今は、それらに頼って、絶景を楽しみにいきたいと思っています。

さて、この手のトレッキングはシングル参加の相部屋が基本で、シングル希望は追加料金を払うというシステム。その方が、いろんな人と話できて、これも、ツアーの醍醐味です。

この時の某相部屋さんに、北陸の山の話をしたら、「大笠も登ったことがある」と。しかも、しんがりのSLがいつまでも下りてこなくて、結局桂湖に浮いているのが見つかった…と。彼は夜盲症があったようだから…の話には、びっくり。近年あった北陸での遭難話を、まさかアルプスの山中で、当事者筋から聞くことになるとは…。

そういえば、四姑娘トレッキングの時も、「氷壁のモデルは私の弟なのよ」を聞きました。切れたザイルの件を、井上靖が取材に来ていたそう。私、思わず、その女性の実年齢は？を、計算しておりました。

苗場山…2回登り、苗場スキー場からも特異な山容を眺めました。最近の「グレートトラバース」や、「日本百名山」では、ドローン映像が流れます。こんなふうに俯瞰してみたかったなあ…のうちには、苗場山も該当します。平坦なせいで、1000もある池塘のごく一部しか見られない…。つくづく、もう、ドローン映像の時代です。

さてさて、実家の整理をやったおかげで、アルバムも見直しすることになり、こんな「過去もの」も出てきました。



<白峰殊才商店前（中1）1963.7>

<犀川ダム湖にて（中3）1965.5>

その昔、つまり昭和38年に、金沢大学教育学部附属中学校に、ワンダーフォーゲル部ができま

した（ギネスものか?）。それも、一年生女子3人が音頭をとり、理科教官に顧問をお願いして作ったものです。

それは、たまたま、知人（親の職場知人の娘）の友人が、小学校の時の教生から、「ワンダーフォーゲル」という、新しい言葉を習ったようなのです。他は「何それ？」だったのですが、山岳部よりはおしゃれみたい…と、真似ることになりました。その頃、小学校へ教生に来ていた先輩となると、6期の紺清さんあたりでしょうか？

ともあれ、第一回の夏合宿は白山。砂防から、岩間新道を2泊3日（室堂、岩間温泉泊）で歩きました。写真で数えると、先生4名に、生徒は12名います。第2回は立山三山を2泊3日（内蔵助山荘、雷鳥沢温泉泊）。

そして3年になっての春、「犀川ダムの奥に、ワンゲル部の山小屋があるんだって」で、山小屋を目指すことになりました。でも、駒帰から3時間。今、高桑さんの慰霊碑のある場所で時間切れになって、昼食。砂利道でしたが、幅広い道で、ガードレールもあって、山側には擁壁があり、わざわざそちらへ上がって、食べていた人もいました。

山小屋といったら、北アルプス方面の印象しかない。このダム湖の奥という立地で、いかなる山小屋が？想像もつかないまま、引き返し…。

ともあれ、「じわもん」（現地人）だったから、ワンゲルとは、その時に、もうニアミスをやっておりました…。

ただ、私の山は、山好きの父に連れられての家族登山から出発しています。私が小6、弟が小2の時も、ゆっくりモードで表銀座を歩いています。

私の方は長男次男の手が離れかけた30歳から社会人山岳会に入りましたが、三男の誕生から、家族登山スタイルになりました。そして小2で槍（に、登らせる）も叶いました。

自分自身が歳を重ねて親になると、人間としての親に、向き合える時期がくるものです。あの頃、「家族登山」という言葉はなく、実際、他に子供連れを見掛けませんでした。

父は、肺結核専門の外科医ということで、2週間単位での治療スケジュールというのがあり、休

みはとりやすかったのです。また、看護婦さん親子や、調理師さん、ボイラーマンも、メンバーに加わったりしました。

それが開業して、3年は軌道に乗せるまでと、おとなしくしていましたが、その後は、今しかないとばかり、1週間の夏山休みを取るようになりました。ちなみに、立山～三俣蓮華～伊藤新道（私は高1）や、折立～雲ノ平～槍ヶ岳～新穂高（高2）を歩いています。

今の方が、よくもまあ、患者をあちこちをお願いしたりの決断をやったものだ！と感心します。

結局のところ、そんな刷り込みがあったから、私は、旦那や子供とは山遊びをするものと思っていましたし、学習塾の仕事仲間とも、毎夏北アルプス歩きをしていました。海外トレッキングも、「今なら、行ける！」と、飛び出していました。

この躊躇しないところ、「行きたい」という目的のためにはあらゆる工夫をし、都合をつける（譲らない）ところは、まさに親譲りです。



<新穂高から9時間半で槍へ。 1994.10.8)

息子達は「山へ拉致されていた」と言うけれど、かけがえのない時間を過ごしました。それぞれを嫁さんに渡した今は、夫婦で、のんびり山歩き…晴れている方面へ花探しです。

山だったからこそ、人生のどんな時も付き合っただけでこられました。花見の次には、どんな発展形にして山を楽しむか？

時間だけはある…。あるようで、ないのかも??